

# 出の結果

打撃甚だ大なるに  
 結局不干渉の地位に  
 立ち製鐵所に對し  
 移旁市としての禮儀  
 を表する爲め委員を  
 選任したり但副議長市参事會  
 員を以て委員に充つることとし  
 正十二時閉會したり

# 双方の誤解か

長官は逃げたのでない云ふ  
 職工は不埒な態度だと憤慨  
 既に無期休業を断行せ  
 今更こんな事を詮議立  
 ても死兒の館を計ふる



か可ならん云ふものもこれあ  
 夫れより差當り各區に於て區  
 長副長區長の下役等をして市  
 内に散在する職工個別に對し市  
 の警告の主旨を徹底せしめ其反  
 省を促すことには如何其他  
 區々の意見もありたる様なるが

以て甚だ愚なる様だが其の關係  
 する所稍大なる問題であるから  
 以て是は争ひ得たる儘を報道  
 せんに去る十三日加藤勸十氏が  
 無藤警察部長野村八幡市長立會  
 の上白仁長官と會見の際長官に  
 職工全員を一定の場所集合せ  
 しむるか又は少數の代表者を選  
 正せしむるか二途の一を擇み移  
 親しく之れに話し出来ること  
 出来ぬことは其理由を明

唯に説示せられたし  
 この加藤氏の申入れに對し長官  
 明日部課長會に諮り取極の上  
 六指示の日時を定め御返すべ  
 しと約束せしこの事は加藤氏の  
 告演説にて三四回も聴取せし  
 ことなまが今に至り此間に於て  
 入なる意思の齟齬あ  
 ることを發見したり長官  
 加藤氏の言ふ如く明確に親ら  
 かに話し説示すべしとの約束  
 を爲したりは感じ得らざる何か  
 かし如何なる方法を以てする  
 とも其意思を職工に通じさへす  
 ばよしと心得各工場主任を召  
 喚し之れより職工に傳達すべく  
 意見の在る所を説示されたり

# 熔鑪の休止後の状態

無期休業後の熔鑪を見舞ふべ  
 く二十五日午後三時過東門より  
 入り熔鑪爐迄の間實  
 して人影なく其寂莫たる  
 恰も無人の地に入るが如しで特  
 に熔鑪爐より落下する湯々たる  
 水聲を聞くときは身は深山幽谷  
 に在りて暮色蒼然哀猿の聲を聞  
 くの感じがした事務室に鶴靜枝  
 さんを訪ひ中止に就いての悲候處  
 置を叩いて見ると同氏の曰く熔  
 鑪爐は吹き止めてから一週間や  
 十日間位で繼續の出来ぬこと云  
 ふことは無ひもので併し再び吹  
 き入れは出来ませんが其作業  
 の成績が即日から元  
 の様に行くことは不  
 可能ならぬが夫れが二十日を経  
 て居ることです

# 製鐵所の無期

# 休業断行の内情

其の決心頗る強硬  
 將來の成行果して如何  
 製鐵所が突然廿五日無期休業の  
 大英斷を爲せしは如何なる理由  
 に基くものなるか探問する所に  
 依れば前同盟休以來職工一般の  
 労働振りを見るに情氣瀟々にて  
 生産能率益々減退するのみ  
 て斯かる状況の下に作業を持続  
 するに於ては徒らに將來  
 悪習慣を胎すの虞れ  
 がある正直に勤勉せらるる一  
 の職工に對しては誠に氣の毒で  
 めり併しながら大勢上已むを得  
 ず涙を揮つて斷行を宣明した認  
 ること云ふ然らば幾日を経れば再  
 び事業に就く見込なるか是亦疑  
 眼所の考へは職工の氣分心理狀  
 態が愈々鎮靜安定するでなけれ  
 ば駄目ださ強硬なる決心を爲し  
 て居る様に確信する因に此休業  
 断行に付いては無論長官より命  
 令電報に依るものと思ふが強

# 續々檢舉

製鐵所第二回の盟休に關聯して  
 其筋に檢舉せられたるもの  
 大筒勇、坂本力助、津清丸、  
 澤田勝治、加藤茂男、堺吉信、  
 兒玉吉助、森重皆一、河野健  
 太郎、工藤勇雄  
 以上拘留せらるる又同日一應引致  
 せられたるも直に放棄せられた  
 るものは  
 永瀬定吉、峰伊太郎、藤澤盛村、  
 義夫、近藤林七  
 二十五日の拘留は左の通り  
 相良助、山本利一、飯塚治郎、吉  
 花田平三、郎木下辰馬、大田和、小  
 松西米、誠仲、松池田留五郎

左の兩部  
 分隊を編  
 隊八